

大阪市内にあるとある喫茶店は今日も程よくにぎわっていた。

店内は様々なポスターが貼られていて、同時にメニューや注意書きの紙なども貼られている。そのメニューにはランチタイムには昼食を頼むとコーヒーを半額の二百円で飲むことができる旨が書かれている。注意書きには従業員への告白などの言いよる行為、ストーカー行為、出待ちなどの事を禁止すると書かれていて、その禁止行為をすると出入り禁止になる旨も書かれている。

席はテーブル席とカウンター席に分かれており、カウンターには常連と思われる男たちが数人、椅子を一つ開けて等間隔で座っていた。そのカウンターの向こうには、この喫茶店の従業員の少女が客にふるまうであろう料理を作っていた。従業員はその少女一人しかおらず、常連と言葉を交わしながらも忙しく手をうごかしている。そして、カウンターから少し離れる配置になっているテーブル席には、カウンター席がまだ空いているにも関わらず、男が一人だけ座っていた。

その男は会社終わりにこの喫茶店を訪れることが日課になっている。仕事終わりにこの喫茶店のコーヒーを飲むのが堪らなく好きなのである。

好きなのはコーヒーの味だけではない。木を基調にした落ち着いた雰囲気で、どこか懐かしさを感じられる店内。そして、今はもう引退したマスター、少女の祖父が好きだったジャズが流れており耳からでも安らぎを感じられ、社会の騒音から逃れられるこの店が好きなのである。とはいえ、それは一年前までの話である。今はそれだけがこの店を好きな理由なのではない。

男は視線をカウンターの向こうにいる少女に向ける。少女の歳は十九だと聞いている。豊かな黒髪が艶やかに胸元まで流れ落ちている。その髪先にまで十分に水分が行き届いており、少女らしい艶を持っている。

真つ直ぐに切りそろえられた前髪が邪魔をしてはつきりとは見えないが、眉は薄く描かれていて。目はぱっちりとしておりその潤んだような吸い込まれる黒い瞳は何時間見ても飽きることはないだろう。

鼻立ちは小さくもしつかりとしていて唇は少し薄い。体は全体的に細めでどこか儂い印象が見られる。

そんな印象とは裏腹に客とはきはきと会話し、ほんの少しハスキーがかったその声は店内によく響く、男が少女の声しか聞いていないからかもしれないが……。そして、その少

女が持つ独特な、今にも壊れてしまいそうな雰囲気、その儂さに、男は一目見たときに恋に落ちたのである。

店に行く理由が増えてから一年。男は毎日のように喫茶店に、少女のもとまで通った。しかし、男は少女が美しすぎて、まともに目を合わすこともできず、まともに話もできず、一向に少女との距離を詰められないでいた。まともに話せたのは一年間で二桁にも上らないであろう。

どうすればまともに会話を成立させることができるのかという悩みを抱えていたある日、北海道への転勤が決まるのである。男は三日三晩悩んだ末、男は少女に好きだという思いを伝えることを決心したのである。そして、その日が今日である。

少女に思いを伝えるつもりなのにも関わらず、今日も少女が目の前にいるカウンター席に座らずに、テーブル席に座っているのである。非常に情けない。そう自覚をしながらも行動に移せないのが今まで彼女ができなかった理由の一つであることは間違いないだろう。どうすればいい……。

男が考えていると店内に流れていたジャズに代わり、流行りの音楽が流れてきた。

「リクエストありがとうございます。」

少女はいつの間にかステージが上がっていて、その手にはマイクが握られていた。そして、音楽に合わせて透き通るような声で歌い出した。

(色々あったよなあ)

男は少女がどうしてステージで歌うようになったのか思い返していた。

この喫茶店は先代から少女に引き継いだ時に、先代の淹れたコーヒーじゃないと飲まないと主張する常連客が減ってしまったのである。その常連客を連れ戻すために少女はコーヒーを先代と同じように淹れる練習をするのだが、一向にその味にたどり着けないでいた。その間にも客はどんどんと減っていき、店の存続の危機にまで陥ったのである。そこで客を呼び込むために少女が考えたのが、小さいころから得意である歌を歌う事である。そして、客がリクエストした曲をステージの上で歌うサービスを始めたのである。そのサービスを始めてから、元々いた常連客は戻ってこなかったが、新しい客層を取り入れることができたのだ。

少女がステージの上で踊りながら歌っている。その姿を男はしっかりと目に焼き付ける。今まで何度も見てきたその動きは一生忘れることはないだろう。時折、「キラッ」と少女がウインクをしながら言うときも一緒になってその動作を繰り返す、その一体感も男がこの店を更に好きになった理由でもある。男はもう暫くは味わえないかもしれないこの感覚をしっかりと噛み締めつづける。

「リクエストありがとうございます」

曲が終わり少女が言うとき店内は拍手の音に埋もれる。おそらく、この少女に魅入られていない客はこの店内にはいないだろう。次第に拍手が終わっていき、少女はリクエストした客の方に歩いていき会話を交わす。

男は何度も見てきたその光景を見ながらまた考え始める。思いを伝える機会は今日しか残されていないのである。そうだ、もし自分の思いを伝えたいと少女が、自分の思う最高の返答をしてくれたら会社を辞めてここで一緒に働こう。そう男は自分自身に活を入れる。決心は固まった。

男はカウンターに行き、少女と向き合った。そして――

男は北海道の地に一人で降り立った。男はこれから始める新たな生活への期待を胸に一歩一歩力強く歩みを進める。

これから頑張るしかないんだ、家族も知り合いもないこの地で、一人で。どうせもう戻る場所なんてないのだから。

そう、男はもう戻れないのである、出入り禁止となったあの店へは……。

男は自分に活を入れまた一歩、力強く、前へと踏み出した。